



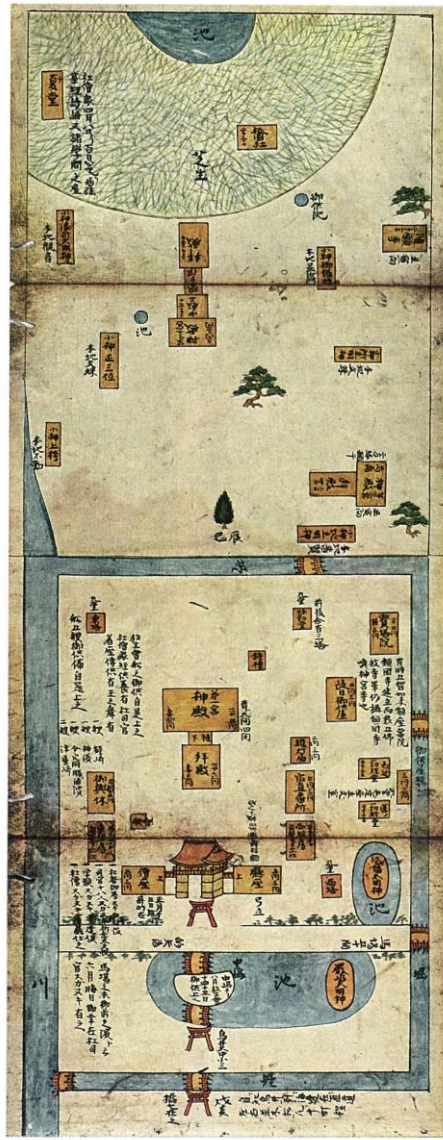
宗像大社の古絵図

『新修宗像市史』中世部会から

海の道むなかつた館では特別展「Hi!! 地ノ図!」が、十二月二十二日まで開催中です。展示されている宗像大社に関連する地図のうち、最も古いものが境内を描いた「宗像社社頭古絵図(むなかつたしゃとうこえず)」です。墨の他に朱、青、茶、緑の四色の絵の具の濃淡を用いたカラー絵図で、南を上にして書かれています。

古絵図の時代

現在の境内と比べて多くの建物がありますが、本殿の周りの末社がないことが重要です。これらの末社は延宝四(一六七六)年に、福岡藩主によって



宗像社社頭古絵図

造営されたものです。それ以前の境内図であることがわかります。現存する本殿と拝殿が描かれていますから、拝殿造営の天正十八(一五九〇)年以降のものです。戦国末期から江戸初期の間の境内の様子を描くことを意図した絵図だということになります。絵図には、古い境内の姿を描きたいとの思いが詰まっていますから、中世の社号をとって「宗像社社頭古絵図」と名付けています。

この絵図は単独で存在しているのではなく、元和三(一六一七)年に成立した『宗像記追考』に付属しているものです。宗像地方の戦国末期までの歴史を叙述した本です。成立後間もなく

写本が作られた時に、新たに絵図が描かれました。絵図を企画したのは、宗像社に奉仕していた豊福長賀(とよふくちやうが)という人物だと考えられます。長賀が実際に筆を執ったわけではありませんが、宗像社に残る古文書を勉強して、実際の境内に、失われてしまった建物を復元、配置した絵図を指示して書かせたのです。

境内のようす

明治の神仏分離令までは神仏習合の時代が続きますから、絵図にも仏堂や塔が描かれています。三つの九重塔(きゅうじゅうのとう)が書き込まれていますが、文献史料からは同時期には二つの塔の存在しか確認できません。九重であったかは全く根拠がありません。釣川沿いの道路も含めて、堀と釣川に囲まれた広い範囲が境内地で、東塔の辺りが現在の神宝館の位置になります。

釣川は今も流れ、堀もかなりの部分を確認することができます。大小の池は明治十七(一八八四)年の境内図にも描かれていて、この絵図には虚構と現実とが混在しているのです。弘治三(一五五七)年の火災によって、本殿、拝殿や他の建物も焼失しました。本殿、拝殿の再建は遂げま

したが、火事以前の規模からはかなり縮小されました。絵図には、火災以前の境内の姿を再現したいという願いがこめられているのです。

堀外のようす



現在の堀外のようす

現在の景観と大きく異なるのは、堀外、絵図の上部にあたるところです。ここに描かれた末社は本殿の周囲に移されました。随願寺や僧侶が修行する夏堂は、江戸時代にはなくなっていました。最上部の池や、「芝生」と書かれた丘陵地は、大正、昭和の初めころまでに、埋め立てられたり削られたりして、現在は農地になっています(写真参照)。「御供池(ごくのいけ)」だけが、「御飯(おい)の水の井」として唯一残っています。

※なお、詳しい解説は、特別展図録にあります。

(中世部会 河窪奈津子)